

「解決者」としての当事者性

ながれ

村上 悟 (むらかみ さとる／特定非営利活動法人碧いびわ湖 代表理事)

私が滋賀で生を受けたのが1976年。その翌年に琵琶湖で赤潮が起き、せっけん運動が展開された。43歳となった私は今、その運動を原点とするNPO 碧いびわ湖（旧滋賀県環境生活協同組合）の代表をしている。子育て世代の仲間と対話を重ね、力を合わせて、未来も安心な暮らしと、地域社会を滋賀で育んでいる。

今回は、市民の力をいかに高めるか—社会課題を一人の当事者として捉え、他者と協力して行動する人々をいかに増やすか—について考えた。

人々の”当事者”意識を考えるとときに思い出すものがある。それは私が通っていた滋賀県立大学環境科学部の、とある先生の研究室のドアに貼られていた一枚のステッカー。魚の形にデザインされた文字で”You’re the solution to water pollution.”（あなたは水質汚染の解決策）と記されていた。You’re the “cause”（原因）でもなく、“victim”（被害者）でもなく、“solution”（解決策）だと。

このフレーズが今でも思い出されるのはおそらく、自身の「原因者（加害者）」としての当事者性や、「被害者」としての当事者性よりも、「解決者」としての当事者性を呼び覚まし、勇気づけてくれたからではないかと思う。

振り返れば、私が市民活動を始められたのも、今も継続できているのも、いつも身近に、「解決者」としての当事者性を呼び覚ましてくれる人々の存在があるからだと思う。

私にとってその最初の一人は、父だった。学校の教員としても、自然保護や環境教育の活動家としても、集落の一員としても、社会的な課題を直視し、他者と協力しあって課題解決をしていた。また私の活動も応援し、失

敗も見守り、時に助言をくれた。

その後も、高校で出会った親友、大学で活動を共にした仲間、市民セクターの諸先輩方、活動や事業をともにしてきた仲間や同僚たちが、手本を示し、実践を共にし、助言を与えてくれたことで、私は「解決者」としての自覚と成長を得ることができたと思う。

今、様々な社会的な課題や危機がある中でさえ、その事実を直視していない人々が多いように感じる。それは、その人々が危機を感じていないからではなく、自分が社会課題の解決に資した経験が乏しいからではないかと思う。「解決者」としての当事者感覚が乏しいから、知ろうとしないのではないかと。だから「解決者」となる経験をし、当事者意識が高まれば、積極的になっていくと思う。

近年、バスフィッシャーの有志の方々が琵琶湖岸の清掃活動を積極的に行っている。私は当初、外来種や釣りゴミの免罪符的なパフォーマンスではないかと懐疑的に見ていた。しかし実際にその方々と出会い活動を共にして、本当に琵琶湖が好きで、琵琶湖に恩返ししたいという純粋な気持ちから活動されていることがわかった。この冬には知り合いのバードウォッチャーにも声をかけ、彼らの清掃活動に参加して野鳥観察を共にして、同じ琵琶湖を愛する者同士としての相互理解と信頼を育むこともできた。

この地球上に生きる誰もが、社会的な課題の原因（加害者）でもあり、被害者でもあるが、同時に「解決者」としての当事者でもあり得る。その視点で「わたし」と「あなた」を見つめ直し、関わり直すことから、互いの可能性を呼び覚まし合い、新たな協力と信頼を育んでいけるのではないかと、私は今、考えている。